

研究動向

二〇〇四年夏 北京・上海の毛沢東研究

——日中学术交流の報告(一)(五)——

近藤 邦康

はじめに

二〇〇四年八月一七日から九月一六日までの一カ月間、私は第一四回目の中華人民共和国学術訪問を行い、大東文化大学と北京外国語大学の交流協定による短期研究員として、研究と資料収集に当った。北京外国語大学日語系の系主任汪玉林先生はじめ諸先生、および大学院生紀曉晶さんには、大変お世話になった。厚く御礼申し上げる。

今回私は二つの新しい体験をした。

第一は、外国人専門家待遇で、中国の大学で暮らしたことである。

大東文化大学が私の渡航費と中国国内の交通費の一定額を負担し、北京外国語大学が私に宿舍を無料で提供し、一日五〇元(約六五〇円)の生活費を支給した。この生活費で生活できるのかどうか不安であったが、大学は構内に学生および教職員(定年後の旧教職員を含む)とその家族のための宿舍・食堂・病院・商店等を完備した生活共同体(「人民公社」を思い出した!)であり、その一員として構内で生活すれば食費は一日二〇元以下(朝食約一・五元、昼食約八元、夕食約七元)で済んだ(ただし、八月三〇日〜九月五日は上海師範大学で暮らした)。それまで上海、南京、揚州の大学の宿舍にそれぞれ数日間泊まったことはあったが、一九七八年以来二六年間で通算二三回、七九五日の中国生活

のほとんどがホテル暮らしであったので、今回は「中国の人人にまじって暮らせる」うれしさが一段と深かった。中国知識人の生活感覚に一步近づいたような気がした。

第二は、著書『毛沢東 実践と思想』（岩波書店、二〇〇三年七月）の中国語訳『毛沢東 革命者と建設者』（中国青年出版社、二〇〇四年七月）が、実際には八月末に中国で刊行されたことである。

私には以前苦い経験があった。著書『中国近代思想史研究』（勁草書房、一九八一年一二月）が未知の三人の中国知識人によって翻訳されたことを知り、その責任者に訳文の全文を見せるよう要求して、送られてきたゲラを短期間で懸命に点検・訂正して返送したにもかかわらず、「間に合わなかった」と言って謝って来ただけで、私の訂正が全く生かされず沢山の誤訳が残ったまま、『五・四と現代中国』叢書 救亡と伝統——五・四思想形成の内在的論理』（山西人民出版社、一九八八年四月）として刊行されてしまったのである。そのため、今回は最初に編集者に対して、訳文の全文を私に点検・訂正させよという条件を付けた。私としては全速力でその作業を進めたにもかかわらず、一〇カ月かかった。編集者は毛沢東生誕一一〇年記念の二〇〇三年末刊行という目標があったにもかかわらず、作業の終了まで待つてくれた。「中国語版序言」を、一九八二年以来交流を続けてきた金冲及氏（一九三〇—）。中共中央文献研究室常務副主任、研究員。北京大学・復旦大学兼任教授、大学院博士課程指導教授。中国歴史学会前会長）にお願いして書いていただいた。お世話になった人人や機関にこの本を敬贈すると、中国知識人は私に対して、毛沢東研究の一角を担う専門家として一目置いてくれるようになった。いずれも大変ありがたいことである。

私は著書の要点を記した中国語論文「毛沢東 革命者と建設者」（約一万二千字）を書いて、六回の報告会で報告し、討論した。八月中は休暇で大学院生がおらず大学が使えないため、全部九月に集中した。その月日、開催単位、司会者（〇印）、出席者（所屬）は以下の通りである。

①九月三日、上海社会科学院歴史研究所。○廖大偉・陳祖恩（近代史研究室）、程念祺・湯仁沢（古代史研究室）等
一三名

②九月四日、上海師範大学。○廖大偉夫人（人文学院歴史系）、洪小夏（法政学院中共党史）、蔡亮・村田江美子（歴史系大学院修士課程）等二二名

③九月七日、中国社会科学院近代史研究所。歩平所長、○耿雲志・楊天石・李長莉・鄭匡民・劉樹勳・左玉河・鄭大華・齋藤泰治等一八名

④九月七日、中共中央文献研究室。金冲及常務副主任、○陳晋・馮惠・廬潔・安建設・廖心文等二六名

⑤九月一三日、中国人民大学マルクス主義学院。○楊鳳城副院長、汪之先・李永豊・何虎生・劉輝・王曉明・辛逸（マルクス主義学院）・堀江正樹（同大学院修士課程）、蕭延中（国際関係学院政治学系）等三〇名

⑥九月一四日、清華大学人文学院歴史系。○董士偉系副主任、蔡榮蘇・張勇・王憲明等二八名
個人面談・座談を合計一二回行った。月日、氏名（所属）は以下の通りである。

①八月二七日、丁守和（中国社会科学院近代史研究所）

②八月二八日、劉桂生（北京市文史研究館）、董士偉・張勇・王憲明（清華大学人文学院歴史系）

③八月二九日、蕭延中（中国人民大学国際関係学院政治学系）

④八月三〇日、蘇智良（上海師範大学歴史系）

⑤九月一日、楊奎松（華東師範大学歴史系・北京大学歴史系）

⑥九月四日、洪小夏（上海師範大学法政学院中共党史專業）

⑦九月四日、劉寅（上海德瑞美服飾学校）

⑧ 九月九日、徐友漁（中国社会科学院哲学研究所）

⑨ 九月九日、李薇（中国社会科学院国际合作局副局长）

⑩ 九月一〇日、李沢厚（中国社会科学院哲学研究所）

⑪ 九月一日、白鋼（中国社会科学院政治学研究所）

⑫ 九月一日、汪暉（清華大学人文社会科学学院）

これらの報告会と個人面談・座談は、私自身が直接友人に連絡して予約した。

下記の記録は、原則として、報告会で出た話は氏名・発言を記し、個人面談で出た話は氏名を記さず、発言の要旨だけを記す。

以下、一 私の報告原稿の日本語版（一部修正加筆）、二 報告会における質疑応答、三 個人面談の話題と中国の現状に対する見方、という順序で一カ月の学术交流の状況を述べる。

一

毛沢東 革命者と建設者

はじめに 課題と視点

毛沢東は、一九三八年五月―六月延安で「持久戦論」を講演した。そこで、「抗日戦争は持久戦であり、最後の勝利は中国のものである」と見通しを立て、自ら持久戦を模範的に実行した。一九四五年八月日中戦争に勝利して、この見通しが正確であったことを実証し、戦後国共内戦に勝利して、一九四九年一〇月一日中華人民共和国を創立した。

東西冷戦のなかで、戦争状態を終結しないまま二三年が経過したが、一九七二年九月田中角栄と毛沢東・周恩来が交渉して、日中両国は国交正常化を成し遂げた。その共同声明には、「日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」、「中華人民共和国政府は、日中両国国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の請求を放棄することを宣言する」と明記された。この政治的基礎の上に、両国の経済交流と文化交流が大規模に行われるようになって、今日に至っている。

私はこの歴史の事実から出発して、われわれ日本人の運命に対してこのように重大な影響を与えた毛沢東の思想を、深く広く把握したいと思う。

第二次世界大戦後の日本の中国思想史研究に、次のような一つ思想傾向が存在した。

「日本の侵略、敗戦と中国の抵抗、革命」という歴史を直視して、文化の面で両国の近代化の思想的意義を深く掘り下げ、中国近代を鏡として日本近代の否定面・暗黒面を照射し、自己批評する。政治の面で米国と日本政府の中華人民共和国敵視政策と中国包囲網に反対して、日中両国の友好関係の樹立を要求する。

竹内好（一九一〇—一九七七）と西順蔵（一九一四—一九八四）は、このような思想傾向を代表する人物である。私は彼ら二人の師の立場と姿勢を学習する。

私は、日本人の眼から見た毛沢東を描き出すことを志して、次の三つの視点を設定する。

第一は、中国近代と毛沢東という視点である。

アヘン戦争から中華人民共和国建国に至る一〇〇年余の中国近代を、中国が西洋近代資本主義世界にひきずりこまれて滅亡の危機にさらされ、中国人が外国の侵略と国内の専制に抵抗して悪戦苦闘し、ついにこれを打ち破り起死回生した過程と見て、この「救亡（国家・民族を滅亡から救う）——民主（人民を君主の統治の客体から国家・革命の主体に

轉換する)の歴史のなかの毛沢東の位置と役割を解明する。これについては、竹内好の毛沢東研究の土台の上に立つ。竹内好は中国の近代を、西洋の自己拡張・侵入に対する抵抗ととらえ、魯迅の文学と毛沢東の根拠地をその代表と見た。根拠地を、「自らのエネルギーによって自生」し、「他の力に依存」せず、支配されず奪いえない独立の存在であると規定した。根拠地の「最小の単位が個人である」と言って、これを「人格の独立」と結びつけた。

第二は、中国思想史と毛沢東という視点である。

東アジア文明の中心であった四〇〇〇年の旧中国の思想・体制と格闘し価値轉換を遂行して、新中国の思想・体制を創造する作業を、毛沢東が革命でも建設でも持続したことを考察する。これについては、西順蔵の毛沢東研究を継承する。

西順蔵は中国近代を、西洋近代の侵略に抵抗しつつ、最底部である農村が自己変革して自らの受動性を能動性に転化し、西洋近代の侵略と中国の旧体制を打破した過程、と見た。この過程において、旧中国の総体的「人倫」原理と「行」の立場が、西洋近代の個人的「人格」原理と「知」の立場に抵抗しつつ自己を顛倒して、人民が総体的抵抗運動の中で個人的主体となり、「能動的な人格の集団となる」(人民一人一人が個人的主体として主観能動性を発揮する)よう指導・教育する毛沢東哲学を創出し、総体的「人民」原理と「実践」の立場を生み出した、と考えた。

第三は、中国社会主義と毛沢東という視点である。

毛沢東がソ連社会主義から何を吸収したか、ソ連の枠組をどのように運用して中国独特の社会主義を生み出したか、を研究する。

一九八〇年代から一九九〇年代にかけて、ロシア史・ソ連史の専門家和田春樹(一九三八―)は、東欧の激変、ソ連のペレストロイカと解体、中国の文化大革命から改革・開放への轉換、という世界史の巨大な変動を直視して、

「世界戦争に備える新しい総力戦体制」としての「国家社会主義」から、世界経済の時代に適應する社会民主主義への転換、という分析枠組を提起した。私はこの枠組を、中国社会主義と毛沢東の研究に応用する。

私は一人の日本人として、一人の知識人として、先ず毛沢東個人に強く引きつけられるので、一時代を生きた個人としての毛沢東の思想を、革命と建設を貫く一つのものとして把握することをめざす。毛沢東は、人民に自らの力量を発揮させて、外国の侵略に抵抗し国内の束縛（「網羅」）を突破（「衝決」）させる、民族、人民など集団の解放と個人の解放とを結合し、国家独立と人民革命とを結合する、という根本思想において一貫していたと思われる。その核心は「人民、矛盾、大同」という、帝国主義に対する外部からの「絶対批判」（梅本克己）であったと考えられる。また、毛沢東は、革命期は「人民」理想主義と「実際」現実主義をねばり強く結合した、建設期は根本的態度は変わらず、軍事・外交の領域ではかなり適切に両者を結合したけれども、内政と経済の領域では乖離して困難に陥り、再結合に力を注いだと見る。この一貫と変化を手がかりにして、思想の展開の大筋を解明したい。

毛沢東は、「救亡——民主」という中国近代思想史の枠組を受け継ぎ、その上に「帝国主義とプロレタリア革命の時代」というレーニン主義の枠組を重ね合わせて、新民主主義革命に参加し指導した。課題を反帝国主義・反封建主義・反官僚資本主義と把握し、主体を「民衆→国民→農民→民族→人民」と発展させ、「マルクス主義の中国化」の方法、特に「農村が都市を包囲する」人民戦争の戦略戦術を用いて、中国近代の「救亡」の課題を基本的に解決したのである。

(一) 青年期（一八九三—一九二一） 個人独立と人人連合

毛沢東が青年期に形成した「個人が独立し、人と人が連合する」という五・四新思想が、革命者の思想と建設者の思

想の原型・基礎として、非常に重要である。

毛沢東は農民出身の知識人であり、幼時私塾で「旧学」（中国伝統學術）の基礎を学んで「孔子を非常に信じ」、歴史に興味を持つとともに、『水滸伝』『三国志演義』等の小説、特に反抗の物語を好んだ。西洋の技術を学ぶ洋務運動に参加して議院と商務（資本主義商工業）を強調した、鄭観応の『盛世危言』を読んで学業を続けなくなり、高等小学堂に入学して「新学」（西洋近代の学問）を学び、戊戌変法運動で活躍した梁啓超が編集する『新民叢報』を読んで立憲君主制に賛成し、中学に入学し革命派が発行する『民立報』を読んで排滿革命運動に賛成し、辛亥革命が始まると湖南革命軍に一兵士として参加した。

毛沢東は、抜群の方向感覚と読書力・行動力により、洋務→変法→革命の約五〇年の中国近代思想史を五年間に圧縮して自身で再現し、時代の最先端に立ったのである。

毛沢東の師楊昌済は湖南で戊戌変法運動に参加し、政変後日本とイギリスに留学して教育学と哲学を学び、帰国後辛亥革命を高く評価し、「人格独立」→中等社会（「市民」）形成→国家独立」を主張し、五・四新文化運動に身を投じた。

毛沢東は湖南第一師範で楊昌済から哲学を学び、先ず国家への関心（政治革命）をいったん個体、自我、内面に収斂させ（文化革命）、さらにそれを社会の改造に拡大した（社会革命）、と考えられる。

五・四運動時期、毛沢東は、自我について、楊昌済の「吾を主とする」「公共心のある個人主義」を「精神の個人主義」（「利己」）、「自己実現」、「充分に自己の身体及び精神の諸能力を發展せしめ、最高に至らしめる」ことを「人類の目的」とし、「利他」→「身を捨てて人を救う」ことを手段として「利己」のなかに包括する）に發展させて、これを抑圧する三綱（君―臣、父―子、夫―婦の上下秩序）と教会、資本家、君主、国家に反対した。人民について、楊の

「民を主とする」を継承し、クロポトキンの無政府主義を吸収して、「民衆の大連合」を提唱し、「小連合を基礎とする」多数の民衆の大連合の力量が最強であり、必ず少数の強権者・貴族・資本家の大連合から知識と金銭と武力を奪還して、知と愚、富と貧、強と弱の格差を逆転し、「全体人民が自由に発展する光明社会」「黄金世界」を実現することができる、と主張した。当時、李大釗は、政治、経済、社会、家族を貫いて個性を束縛し人と人を分断する儒教上下秩序、「タテの組織」を、束縛され分断されて苦痛を感じる一人一人が自ら打破して、「ヨコの組織」を樹立し、「個性自由、共性互助」の「大同」世界を実現せよ、と主張した。毛の「精神の個人主義」と「民衆の大連合」は、李の「個性自由、共性互助」と共通の構造を持つ。毛沢東はここで、多数民衆は必ず少数強権者に勝利する、人は必ず圧迫に反抗する、という「人民」理想主義を確立し、敵に抵抗する主体Ⅱ民衆を定立したのである。

方法について、毛沢東は、中国政治は「上が実で下は虚」であるから、上から下へ、政治組織、国家、団体によって社会組織、地方、個人を改良する、レーニンの道を歩むことはできない、社会組織、地方、個人から着手する、楊昌済の「下から変ずる」道を歩むべきだ、と考えた。やがて、共産党を組織し、「階級戦争」を行い、プロレタリア独裁を樹立し、社会経済制度を改造する、「激烈な方法の共産主義」（レーニン主義）を選択した。

私は、楊昌済の影響を深く受けた毛沢東の早期思想Ⅱ五・四新思想は非常に重要であり、マルクスレーニン主義を受容した後も消滅せず、底流として持続して革命主体の形成に積極的役割を果たしたと考える。

毛沢東は、中国共産党第一次全国代表大会に参加した後、革命主体Ⅱ多数民衆の具体的な階層を求めて、先ず労働運動に従事し、次に商人に期待をかけ、ついに湖南農民運動を視察して、農民こそ中国革命の原動力であると確信した。暴風驟雨のような農民運動の巨大な力量は必ず帝国主義・軍閥の統治の基盤である地主階級の政権を打倒することができる、と革命の前途を見通した。奴隷Ⅱ農民（主として貧農・雇農）が、仇敵Ⅱ地主の権力を打倒するとともにその権

威に打撃を与え、政権を転覆するとともに族権・神権・夫権を動揺させて、身心両面の束縛を打破して自分で自分を解放し、人と人が連合して農民協会を組織し、農民武装を創出し、自分たちで規律を打ち立てマージャンやばくちやアヘン等悪い習慣を厳禁して、経済建設、文化建設を推進している、という情況に目を見張り、断乎として農民運動を支持した。

五・四運動における李大釗や毛沢東など都市の知識人の文化革命・社会革命の思想が、湖南農民運動で農村に入って農民の政治革命・社会革命・文化革命の運動に具体化した、と考えられる。さらに、この思想がソビエト革命できわめて重要な役割を果たし、中国労働軍兵士に封建専制主義を打破させ、将兵平等、衣食同一、兵士の集会・言論の自由を実現し、「精神解放」を得させて、彼らを革命主体に転化したと思われる。

楊昌済の「吾を主とする」を継承した早期の毛沢東の「精神の個人主義」が、主観能动性（一九三七年）に、楊の「民を主とする」を継承した「民衆の大連合」が、大衆路線（一九二九年）に、楊の「下から変ずる」と「激烈な方法の共産主義」（レーニン主義）との結合が、「マルクス主義の中国化」（一九三八年）に、それぞれ発展したと見ることが出来る。

（二）革命者（一九二二—一九四九） 最後の勝利、持久戦

毛沢東は、ソビエト革命、抗日戦争、人民解放戦争を指導して、「人民」理想主義と「実際」現実主義とを適切に結合し、「農村が都市を包囲する」「持久戦」の方法を用いて、「最後の勝利」をかちとった。統一戦線、武装闘争、党建設を、中国革命の「三つの宝具」として最も重視したが、ここでは武装闘争に重点を置く。

武装闘争について、毛沢東は、ソビエト革命戦争の経験を、「中国革命戦争の戦略問題」（一九三六年一二月）で理論

的に総括した。一方で、紅軍は土地革命を実行するので農民の援助が得られ（軍民一致）、兵士が自分自身の利益のために戦い、指揮官と大多数が農民出身である兵士が政治上一致しているから（將兵一致）、土地革命に反対するので農民の援助が得られず、兵士と下士官が命がけて戦わず、將校と兵士が政治上分裂している国民党軍に対して、長期的観点から見れば勝利する可能性がある（「戦略上は一を以て十に当たる」）、と強調した。他方で、政治、経済、交通、文化の各領域において、敵は強大で我は弱小であるので、当面の観点から見れば、紅軍は急速に勝利することができず、持久戦を堅持しなければならぬ（「戦術上は十を以て一に当たる」）、と主張した。多数の農民階級は必ず少数の地主階級に勝利するという「人民」理想主義と、敵の強大と我の弱小という力関係を直視して、「持久戦」を戦い「最後の勝利」を得るという「実際」現実主義とを結合したのである。

毛沢東は、「敵が進めば我は退く。敵が留まれば我は攪乱する。敵が疲れば我は攻撃する。敵が退けば我は追撃する。」「敵進我退、敵駐我擾、敵疲我打、敵退我追」の「十六字訣」という戦法を編み出した。すなわち、弱小な紅軍が強大な敵軍を根拠地に深く誘い込み（「誘敵深入」）、人民大衆を自覚させ戦争に参加させ、敵の進攻に対する抵抗を通じて自らの潜在的力量を顕在化させる、人民の援助と紅軍の集中という有利な条件を造り出して、敵強我弱の力関係に変化を起こし、敵の戦力が下降し我の戦力が上昇して、敵と我の力量が均衡した時に、我が反攻に転じて、敵の一部を殲滅して、包囲攻撃を打ち破る、という作戦原則を主張した。人民は必ず圧迫に反抗し勝利する、という根本的な信念を堅持し、全局Ⅱ全国における「敵は強大、我は弱小」という現実の力関係のなかで、局部Ⅱ根拠地における「敵は劣勢、我は優勢」の状況を人工的に造り出して、局部の勝利を積み重ねて次第に全局の力関係を逆転し、最後に全国の勝利を得る、という見通しを立てた。こうして、「先に都市を占領して後に農村を奪取する」ロシア革命の道とは逆の、「農村が都市を包囲する」中国革命の道を切り開き、これを中心として「マルクス主義の中国化」を成しとげたのである。

る。

毛沢東は、中国近代最大の「救亡」運動である抗日戦争において、武装闘争について、「持久戦論」（一九三八年五月—六月）を講演して、「人民」理想主義と「実際」現実主義を見事に結合した。一方で、日本の軍事的封建的帝国主義としての退歩・野蛮が、「日本国内の階級対立、中国との民族対立、世界大多数の国家・人民との対立」を最大限に激化させるから、日本は必然的に失敗する、中国の近百年の解放運動の蓄積による進歩・正義が、「全国の団結を喚起し、敵国人民の同情を激発し、世界の多数の国家の援助を呼びかける」から、「最後の勝利」は中国のものである、と論断した。少数の地主の階級的圧迫に対して、多数の農民は必ず反抗し勝利する、というソビエト革命の理想主義を、少数の日本支配階級が日本民族をだまし強制して中国を侵略する民族的圧迫に対して、多数の中国民族は必ず自覚して抵抗し勝利する、という抗日戦争の理想主義に発展させたのである。他方で、「実際」現実主義に依拠して、軍事力、経済力、政治組織力において敵は強く我は弱いという現実の力関係を直視して、全中国を大きな根拠地に変えて敵軍を深く誘い入れ、人民戦争で抵抗する「持久戦」を提唱し、自らこれを模範的に実践して、敵後方に無数の小根拠地を創造してゲリラ戦（「遊撃戦」）を行った。

毛沢東は、次のような持久戦の三段階を見通した。①敵の戦略的進攻、我の戦略的防御の段階。②戦略的対峙、すなわち、敵の戦略的保守、我の反攻準備の段階。③我の戦略的反攻、敵の戦略的退却の段階。そのなかで、最も困難な第二段階を最も重視した。中国軍は日本軍の進攻に押されて後退するが、ある線で停止して均衡し持ちこたえる、中国民族は覚醒し、巨大な潜在的力量を顕在化させて弱から強に変り、それに国際的援助が加わって、敵の力を上まわり、敵軍を国外に押し返す、と主張した。

毛沢東は、「戦争の偉大なる力のもっとも深く厚い根源は、民衆のなかに存在する」と言い、抗日戦争に勝利する原

動力を、「全中国人民を動員して、その抗日の自覚的能動性を全部發揮させ」ることに求めた。これは、中国人民一人一人が「最後の勝利」は中国のものであるという信念を抱き、「持久戦」の方法を受け入れて、自分が参加する局部の戦闘の敵我矛盾を、正確に認識し正確に実践して解決し、局部の勝利をかちとることを意味する。

この自覚的能動性は、「実践論」（一九三七年七月）に言う主観能動性である。「中国革命戦争の戦略問題」の「第一章 四 重要な問題はよく学ぶことにある」に言う、「客観実際」すなわち「敵と我の両方面」が「研究する対象」であり、「ただわれわれの頭脳（思想）だけが、研究する主体である」、という思想が「実践論」に発展したと考えられる。そこには次の三段の論理が含まれている。

1. 客観実際⇨敵我矛盾のなかの一方面であり身体的存在である実践主体⇨我が、敵我矛盾を解決しようとして革命的実践に参加する。

2. 身体の一部である頭脳⇨主観⇨認識主体が、客観実際⇨敵我矛盾を認識の対象として主（観）客（観）矛盾を構成し、主観と客観の符合を求めて、偵察・思索・判断の認識過程を進み、法則を把握する。敵我矛盾の認識を感性的段階から理性的段階に深化する。

3. 実践主体⇨我が認識した客観的法則にもとづいて実践し、能動的に客観世界を改造する。認識を検証して主客矛盾を解決し、敵に勝利して敵我矛盾を解決する。

「実践論」はこれを基礎として、以下のような認識論を構築した。①実践から認識が発生し、認識は実践によって検証される。②感性的認識から能動的に理性的認識に飛躍し、理性的認識から能動的に革命的実践に飛躍する。飛躍させる認識の能動的作用が人の主観能動性である。③実践し、認識し、再実践し、再認識し、循環往復して無限に至る。

「矛盾統一法則」（一九三七年八月、『毛沢東選集』第一巻の「矛盾論」の原型）は、ソ連哲学の「主要矛盾」の概念

を吸収し、「次要矛盾」（第二に重要な矛盾。「副次的な矛盾」という新しい概念を付け加えて、主要矛盾と次要矛盾の相互転化の理論を形成した。これにもとづいて、中国と日本の矛盾が主要矛盾に上昇し、国内矛盾が次要矛盾に下降した、という状況判断と、抗日民族統一戦線結成の必要性和可能性を、理論的に裏付けた。また、ソ連哲学の「矛盾の主要方面」の概念を吸収し、「次要方面」（第二に重要な方面。「副次的な側面」という新しい概念を付け加えて、矛盾の主要方面と次要方面の相互転化の理論を形成した。これにもとづいて、帝国主義が主要方面・優勢から打倒される地位に転化し、中国が「被圧迫の地位から自由独立の地位に転化する」民族革命戦争の法則と、農民が被支配者から支配者に転化し、地主が支配者から被支配者に転化する農民革命戦争の法則を把握した。

毛沢東は「実践論」と「矛盾統一法則」により、「宇宙の矛盾——人の実践」の革命哲学を形成した。

統一戦線について、毛沢東は、一方で、「擁護抗日」（蔣介石を擁護して日本に抵抗する）を堅持し、蔣介石・国民党・三民主義の指導的地位を承認し、蔣の上からの国家統一を支え、国共合作を堅持し、分裂に反対した。他方で、共産党・八路军・抗日根拠地の独立自主を中心支柱として、各党各派各界各軍の自立・連合を促進し、下からの人民民主により蔣介石に圧力をかけて、蔣に抗日・容共を継続させ、反共・投降を阻止しようとした。これに成功したことが中国の抗日戦争勝利の主要な原因の一つだと思われる。また、国民党に対して、抗日戦争において第一党、主力軍、実力指導の責任を負うよう要求しながら、共産党が第二党、遊撃支隊、政治指導の任務を担って、自らの政権と軍隊を維持したまま、どちらが日本とよく戦うかを競争して、じりじりと大衆の支持を獲得して自らの実力を拡大した。

党建設について、毛沢東は、共産党員に向かって、学風を整頓して主観主義に反対し、党風を整頓してセクト主義に反対し、文風を整頓して党八股に反対せよ、と要求した。党員に「人民に奉仕する」道徳を身につけさせ、「大衆路線」（大衆のなかから大衆のなかへ）と「实事求是」（実際の事物のなかから法則をつかむ）の能力を養成しようとした。

しかし、毛沢東の「延安文芸座談会における講話」（「文芸講話」）を、魯迅の文学観と比較すると、疑問が起こる。

魯迅の文学観は、「人生のため」、「人生を改良するためでなければならない」という文学の客観的任務と、「よい文芸作品は、これまで大抵は、他人の命令を受けず、利害を顧みず、自然のままに心から流露したものです」、「文学は結局一種の余裕の産物だ」という自己の内心の自然な表現、との二本の柱を立て、その間を、作家が「革命人」となること、「作家の無産階級化」という柱によって結合する、という構造を持っていた。「文芸講話」は、魯迅から文学の客観的任務の柱と人の革命化の柱を継承し発展させたが、文学者の内心の自然な表現の柱を注意深く継承したとは思われない。むしろ、「自分の作品を小ブルジョア階級の自己表現として創作している」、「彼らの魂の深いところにまだ小ブルジョア階級の王国がある」と言って、階級論により文学者の小ブルジョア階級思想の自己表現をきびしく否定して、彼らの主体性を束縛したのではないか。

人民解放戦争において、毛沢東は、「連合政府論」にもとづいて政治闘争を指導し、「持久戦論」にもとづいて武装闘争を指導した。先ず、蒋介石・国民政府と交渉して双十協定を締結し、平和、民主、団結、統一を基礎とし、蔣の指導の下で長期合作して平和建国を実現する、と共同で宣言した。次に、一方で、平和協定を破って解放区に全面進攻する国民政府軍に対して、戦略防衛を実行し、他方で平和、民主の回復を要求して、農村の戦争、革命の闘争と都市の平和、民主の闘争とを結合した。最後に、人民解放軍が戦略進攻に転ずる転換点に到達したと判断して、一九四七年一〇月、「蒋介石打倒、全中国解放」のスローガンを打ち出し、土地改革を実行し、戦争と革命を貫徹して、ついに全国の勝利をかちとったのである。

毛沢東はこれまで、自ら被圧迫人民の側に身を置き、革命を実践する過程のなかで、中国の社会経済構造を分析して、敵は帝国主义・封建主義・官僚資本主義に圧迫・搾取されて貧困と失業に苦しみ、「飯を食う」ことができないからこ

そ、敵に反抗し革命によって自らの独立と生存を回復する、階級、階層、社会集団、個人の総体、帝国主義の「墓掘人」として、我々人民を定立し、その主力を多数の農民、特に貧農・雇農とした。革命に勝利し国家の創出に取り組んだこの時点に、「人民民主独裁について」（一九四九年七月）で、被圧迫者・被搾取者である人民が主体となり、主観能動性を発揮して、不断に民族矛盾・階級矛盾を認識し実践により解決して、不平等を平等にし、人民共和国を經由して、圧迫・搾取がなく階級・国家・政党が消滅する「大同」（「全人類がすべて自覚的に自己を改造し世界を改造する」）「世界共産主義時代」に向かつて前進する、という帝国主義に対する外部からの絶対批判、「人民、矛盾、大同」を、実践により検証されたものとして主張した。これは初期マルクスの資本主義に対する内部からの絶対批判、「プロレタリアート、自己疎外、共産主義」に照応する。

(三) 建設者（一九四九—一九七六） 「上からと下からの」二本足で歩く

中国革命に成功した毛沢東は、やはり中国近代の「救亡——民主」の枠組とレーニン主義の「帝国主義とプロレタリア革命の時代」の枠組とを重ね合わせて、中国には国内の「労働者階級とブルジョア階級の矛盾」と国外の「中国と帝国主義の矛盾」という二つの基本的矛盾が存在するととらえて、「宇宙矛盾——人の実践」の革命哲学をそのまま反帝闘争と国内建設に応用した。人人を教育して「人民に奉仕する」集団主義道徳（「大公無私」と、世界を改造し自己を改造する能力（主観能動性）を養成することに努めた。五億人民が革命の主体から国家の主人、建設の主体に成長して平等な社会を創造する、という「人民平等」原理（ヨコの組織）を基礎とし、党員四五〇万人の共産党が「執政党」（政権担当政党）となり、「中央——地方（省、県）——基層（郷、鎮。単位）」の「指導——服従」の巨大なピラミッド型組織を構築し、人民を指導し国家を運営する、という「共産党の指導」原理（タテの組織）を筋金とした。毛沢東

は、「毛沢東——共産党——人民大衆」（「毛——党——人民」）循環構造を、根拠地から国家に拡大して、政治領袖・思想導師である毛自身が要となってヨコとタテの両方面の均衡を取り、人民が主観能動性を発揮し不断に矛盾を認識し実践して解決して、「大同」に向かって前進する大衆運動と、共産党が人民大衆の意見を集中して方針を立て、人民大衆を指導して方針を実行させる大衆路線とを結合しようとした。

スターリンがドイツと日本を打ち破って第二次世界大戦を終結させたことと、社会主義的工業化と農業集団化を強行して戦争に勝つための物質的基礎を築いたことを、毛沢東は高く評価した。毛自身も、国外は、東西冷戦のなかで、蒋介石政権・米国と台湾海峡で対峙し、帝国主義が起こす第三次世界大戦を人民の世界革命により阻止することをめざして、自国は人民戦争態勢を取り続け、根拠地の後身として人民公社を創出した。米軍と朝鮮で激戦し、ベトナムの抗仏戦争・抗米戦争を後方支援し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動を援助した。ソ連の侵略に備えながら、一九七二年に中米和解と日中国交正常化を成し遂げて中国包囲網を破綻させ、世界各国に中華人民共和国を正式に承認させた。これと一九七五年のベトナムの勝利が、アジアにおける世界戦争の時代を終結させた。

毛沢東は、国内は、共産主義の目標をかかげて、人民民主独裁の下で、全体人民の力量を発動して、新民主主義から社会主義改造、社会主義建設へと進み、人人の自覚を高め生産力を急速に増大させて、社会主義現代化強国を建設して、帝国主義に対抗しようとした。そのため、「世界戦争に備える新総力戦体制」である、「共産党が国家と癒着して社会を一元的に支配する、党・国家・社会団体が一体化した集権政治。国家所有・集団所有と計画経済。マルクスレーニン主義の国教（国家イデオロギー）化」というソ連の国家社会主義の骨組を導入した。また、『ソ連共産党史小教程』に書かれた、「急速度工業化と農業集団化を推進し、左右の異論を党内闘争によって処理する」（「上からの革命」という社会主義建設のスターリンモデルを受容した。これを中国の人民戦争方式で運用し、ソ連の政府の命令による上からの

「二本足で歩く」方法を、下からの大衆運動と上からの政府の命令・規則とを結合した「二本足で歩く」毛沢東モデルに改造して、農業集団化と急速度工業化を推進し、独立した工業体系と国民経済体系をほぼ築き上げた。

毛沢東が社会主義建設を指導して成果を挙げた一面を評価するとともに、彼が損失を出した一面を直視しなければならぬ。

一九五七年四月末、毛沢東は、中国で整風運動によってスターリンの「左」の教条主義の誤りを克服する実例、すなわち、社会主義社会の矛盾を主として人民内部矛盾として解決する模範例を世界に示そうとして、開門整風運動を起こした。その動機は、共産党が党外知識人の批判を受けて自らの官僚主義、セクト主義、主観主義の作風（活動方法）を整頓することにあった。その結果、一部の知識人が、共産党の作風を批判するという毛自身が想定した枠を突破して、「共産党の指導」制度自体の批判にまでふみ込んだ。そこで毛は、彼らを右派分子と規定して、反「左」の開門整風を反右の反右派闘争に転換し、五五万人の知識人に打撃を加えて、共産党と知識人の間に深刻な相互不信を作り出した。

一九五八年—一九六〇年、毛沢東は大躍進運動を発動し、農民を主とする人民大衆の「共産主義精神」を動力とし、農民が創造した人民公社を共産主義へ移行するための組織形式と見なし、人民戦争方式によって高度経済成長を実現し、共産主義運動を推進して共産主義社会に到達することをめざした。「共産主義精神」とは、人民大衆が、第一に貧困、第二に文化水準が低く白紙状態にある（「一窮二白」）、という不利な条件に抵抗して奮起し、自覚的・自発的に猛烈に働いている、過去の「奴隷」の顔はもはやなく、「主人」となったのだ、という意味である。しかし、毛沢東と共産党は、課題である経済建設の巨大な困難と、主体である「毛——党——人民」の能力の不足（技術水準・管理水準の低さ）との力関係を正確に測定せず、高すぎる目標を掲げ、人民に過度の労働を強いて、国民経済がバランスを失って挫折し、不正常的な死亡と出生減少の合計が四〇〇〇万人と推計される莫大な犠牲を払った。「人民」理想主義が独走し、

「實際」現実主義が低下してそれに追いつかず、困難に陥ったのである。

ただし、毛沢東は、「共產主義精神」（自発。「我のものは人のもの」）を鼓吹すると、「共產風」（強制。「人のものは我のもの」）が大いに吹き荒れたことを、真先に察知した。「共產風」とは、県党委員会と公社党委員会の、「平均主義の傾向（公社内の各生産隊・各個人の収入の格差を否定して、均等に分配する傾向）」と「過度集中の傾向（生産隊の財物や蓄積や労働力を無償で徴発して、公社に集中する傾向）」などの農民を剝奪する風潮であり、また、貧農・下層中農が中農の利益をかすめとり、平均主義をやるうとする傾向である。毛沢東は反右から反「左」に転換して、社会主義の原則（労働に応じた分配。等価交換。「我のものは我のもの」）を強調し、「ブルジョアの権利」について、一部分（ひどい等級制。幹部と大衆の不平等な関係）を破壊しなければならないが、他の一部分（賃金制。「多く労働した者が多く受け取る」）を保存しなければならない、と主張して、「共產風」の克服につとめた。次第に「實際」現実主義を回復し、力関係を冷静に測定して、大躍進運動から調整政策に転換した。

一九六六年—一九六九年、毛沢東は文化大革命を發動した。第一に、社会主義教育運動を引き継ぎ、毛沢東思想学習運動を推進し、党員・人民の集団主義道徳を高め、矛盾を認識し実践して解決する能力（主観能動性）を向上させて、人民に大衆運動を起こさせ、党に大衆路線を回復させることに努めた。人民に党中央に出現した修正主義（対ソ妥協と官僚主義・資本主義）を批判させ、党幹部の特権階層化と腐敗を打破させ、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働の三大差異を縮小させて、不平等を平等にし、「大同」＝共產主義に向かって無限に前進させることをめざした。第二に、劉少奇修正主義党指導部を批判し打倒し、毛沢東思想に基づいて中国共産党を改造し再編成しようとした。第三に、ソ連共産党の修正主義、大国主義とソ米合作に対する批判を強化し、ベトナムの抗米戦争を支援し、自国の三線建設を促進し、中国国家を延安型根拠地に再編成して、米・ソの侵略戦争に抵抗する人民戦争を準備した。

毛沢東が文化大革命を發動した動機には、外国の侵略に抵抗し、国内の束縛を突破して、人民が力量を發揮する、という根本思想が含まれており、帝国主義に対する外部からの絶対批判、「人民、矛盾、大同」が貫いていたと考えられる。

ただし、毛沢東が文化大革命を推進した方法は、自己破壊的であり自滅的であった。

第一に、思想内容について、毛沢東と劉少奇との対立を極端に単純化して、社会主義と資本主義との矛盾と規定した。第二に、毛劉対立を処理する手続について、このような極めて高度な複雑な問題を、本来それを解明し解決する責任と能力を有するはずの政治局常務委員会で徹底的に討論せず、人民大衆に直接訴えた結果、党内、党と紅衛兵・人民との間、紅衛兵内部・人民内部で、「食うか食われるか」の激烈な闘争が行われて、莫大な犠牲を出した（四〇万人が殺害され、一億人が迫害されたと言われる）。第三に、劉少奇に対する処遇について、毛沢東は毛劉対立を人民内部矛盾として解決するという初志を抱いていたにもかかわらず、それを貫徹せず、階級闘争、路線闘争、敵我矛盾として処理した。

毛沢東は、抗日根拠地と農村人民公社の人と人が平等なコミュニオン（「公社」）の理想を掲げて、学生の学校党委員会に対する造反や、党中央劉少奇・鄧小平指導部が派遣した工作组に対する造反を支持して、「反動派に対しては造反有理（むほんに道理がある）だ」と呼びかけた。中国社会に多様な複雑・深刻な政治矛盾や社会矛盾が存在するため、平等の理想と不平等な現実との矛盾に挟まれて、不満を抱き苦痛を感じていた学生には、毛沢東の呼びかけに呼応して紅衛兵となり造反する内在的動機があったと思われる。しかし、毛沢東は一九六七年七月―八月に、紅衛兵運動が引き起こした「天下大乱」を統制できなくなり、運動の重点を、「造反有理」、反右から「大連合」、反「左」に転換し、「天下大治」の実現に努力した。一九六八年七月に労働者毛沢東思想宣伝隊を派遣して、紅衛兵運動を制圧し、一九七五年一

一月、文化大革命には「七分の成果、三分の誤り」がある、誤りは「すべてを打倒せよ」と「全面内戦だ」、と言った。毛沢東は紅衛兵を、現状を否定する造反革命の主体から、現状を改良する国家の主体に成長転化させる、という意図を持ってはいたが、それを貫徹しなかったのである。

下から嵐のような勢いで盛り上がった人民の大衆運動を、毛沢東・共産党は上から適切に指導することができなかった。しかしながら、上述の運動は「二本足で歩く」方法を実践しており、その成果と損失のなかに、国家独立、政治民主化、経済発展、文化向上等にかかわる、全面的に研究すべき重要な問題が含まれていると考えられる。

結論

毛沢東における四つの思想課題について考察する。

第一の思想課題は、反西洋化と西洋化である。

毛沢東は、「資本主義の最高の段階」である帝国主義に反対して中国の独立自主をかちとり、西洋・都市の支配に中国・農村が反抗して不平等を平等にする道を切り開いた。その意味で西洋化に反抗して自己を回復した。しかし、マルクス・レーニン主義の方法を用いて中国が国家独立・統一をほぼ達成し、独立した工業体系と国民経済体系をほぼ築き上げ、平等な資格で国際社会に参入したことを、西洋化と言うこともできよう。毛沢東は、自らの思想のなかで、主体と目的における抵抗・反西洋化を根源的とし主要方面とし、方法における学習・ソ連化（西洋化の一変種）を次要方面として、矛盾を持ちこたえながら両方面を追求し実現したと考えられる。

第二の思想課題は、革命と建設である。

(一) 思想内容について、革命戦争の豊富な蓄積を基礎として形成した新民主主義革命の思想と比較すると、毛沢東

の社会主義建設の思想は十分成熟しなかった。

(二) 毛沢東の思考方法のねばり強さが、建設期は革命期よりも低下した。

(三) 毛沢東が異論を処理する手続が、建設期は革命期よりも、民主の方面が減少し独裁の方面が増大して、次第に柔軟性を失って行った。

第三の思想課題は、毛沢東が直面した思想上の難問は何か、それを解決する可能性や他の選択肢 (alternative) はなかったのか、ということである。

(一) 社会主義と資本主義の関係。

毛沢東が、帝国主義を外部から批判した自分と帝国主義を内部から批判したレーニンや資本主義を内部から批判したマルクスとの資本主義観の異同を一層突きつめることによって、自らの資本主義観を一層深化し拡大し、中国と世界の多様な矛盾を一層正確に認識し、一層正確に実践して解決する、という別の選択肢があったのではないか。

(二) 平等と自由の関係。

毛沢東は、不平等を平等にする強烈な人民平等思想を堅持していたが、それと比較すると、自由に対する探求が不十分であった。毛自身が、「放」(ゆるめる) || 民主の方法を取り人人に自由に発言させ自由に行動させると、異論が噴出し暴走して收拾できなくなり、「収」(引きしめる) || 集中・独裁の方法を取ってそれを抑圧する、という循環が反右派闘争、大躍進、文化大革命でくりかえされた。かつて李大釗が提起した、為政者の東洋的専制を拒否する人民の東洋的自由 || 消極的自由を、人民が自ら是非を判断する能力を養成し、討論し民意を形成して政治に実現する近代的自由 || 積極的自由に、いかにして高めるか、という難問にぶつかりながら、毛沢東は結局これを未解決のまま残したと考えられる。

(三) 労働者・農民・兵士人民大衆と知識人の関係。

毛沢東は「人民」理想主義を突出させて、文芸工作者は人民と結合して、「人民が世界歴史を創造する」ことを表現する文化を創造することができ、人民自身が次第に文化を創造する主体となることができる、と主張した。しかし、文芸工作者が自己の内心を自然に表現する自由を公認せず、彼らが文化創造の自由と人民に奉仕する責任とを両立させることの巨大な困難を十分理解しなかった。事実上思想自由と表現自由の幅を狭くして、創造の芽を抑圧することが多かった。根本的には、文学者の内心の自然な表現という魯迅の柱を注意深く継承して、自らの哲学と理論・路線・政策のなかに組み入れる、当面は、一九六四年の周恩来「政府活動報告」のなかにある、文化革命を数百年かけて完成するという持久戦の態勢を取り、「団結——批判——団結」の方針を実行する、という別の選択肢があったのではないか。

第四の思想課題は、毛沢東の思想が、毛沢東没後の中国にとってどのような意味があるのか、ということである。毛沢東は、「個人独立、人人連合」の土台の上に、マルクスレーニン主義を受容し組み替えて実践し、「貧困で、文化水準が低く白紙状態」にある中国の大多数者である人民、特に労働者と貧農・下層中農と、世界の大多数者であるアジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民こそ、不断に世界を改造し自己を改造して、「大同」に向かって前進する主体である、という思想を構築した。紅衛兵運動と「上山下郷」運動に参加して中国社会を根本的に見直し始めた一六〇〇万人の知識青年は、どのようにして毛沢東の実践と思想を自らの新たな土台の上に継承し組み替えて、中国と世界を改造するための貴重な手がかりをつかむのであろうか。

毛沢東は、宇宙と我を一体化して、全体を最大限に発展させるなかで個体を最大限に発展させ、身体を最高に発展させるなかで精神を最高に発展させる、という哲学を打ち立てた。帝国主義に対して、「人民、矛盾、大同」という外部からの絶対批判を遂行した。私はこのような毛沢東の一貫性を土台として、その上で革命と建設における毛の貢献・成果と挫折・損失をとらえることに努めた。毛沢東の巨大で強烈な思想が中国人民大衆を把握して「物質的な力」となり、

一時代の中国と世界を改造したことが、最も重要であると思う。それとともに、毛が大きく深い傷痕を残し、未解決の課題を後人に残したことを、直視せざるをえない。

二

報告会における討論やその後の雑談を通じて、紅衛兵世代（一九四〇年～一九六〇年生まれ。現在六五歳～四五歳）は、毛沢東と文化大革命に対して、賛成するにせよ反対するにせよ、思い入れが非常に深く強烈であるということを、感じさせられた。「毛沢東については、三日三晩語っても語り尽くせない」と言う人がいた。その下の改革・開放世代は、毛や文革から遠く離れていて、上の世代のような激しい感情がなく、冷静に客観的に突き放して見ていることが分かった。

討論で提起された問題のなかで、以下の三つが最も重要だと思った。

第一に、①において、程念祺氏（紅衛兵世代）は、次のような自らの毛沢東観を述べた。

毛沢東は帝王思想を持ち、革命者として建設的であったが、建設者として破壊的であった。革命者としては不断に向上了が、建設者としては人人を制圧し、保守化した。文化大革命では共産党と対立し、他人には「光明正大」をやれと要求したが、自分は「陰謀詭計」を企むことが多かった。劉少奇・鄧小平・周恩来は制度化を進めようとしたが、毛沢東はそれに反感を持ち、制度を破壊した。毛の詞は若いときの作がよく、晩年の作はよくない。「北戴河」（一九五四年夏）はよいが、「重上井冈山」（一九六五年五月）はよくない。毛は「実践論」を好み、「矛盾論」を好まなかった。

私は以下のような意見を述べた。

毛沢東を「皇帝」として批判するだけでは、不十分だと思う。毛は政治領袖と思想導師を兼ねる、すなわち、皇帝

(秦始皇帝)と聖人(孔子)を兼ねるといふ、「中国史上まだ誰も担ったことがない、限りなく重い役割」を担った。「二千数百年の歴史を持つ儒教・王朝が崩壊した空白を埋めて、一身を以て中国の独立と統一を支える大黒柱の役割を担った」のである。そのことが他方で、「相対的な生身の毛沢東個人に対する異論・批判を、真理に対する攻撃と見なして過剰に敏感に受け止め、過剰に反撃するという結果をもたらした」(近藤邦康『毛沢東 実践と思想』二二六頁。以下著者名・書名を近藤と略称)と考える。

第二に、④において、改革・開放世代の人から次のような手書きの質問が寄せられた。

「先程先生は、「個人が独立し、人と人が連合する」という毛沢東の青年期の重要な思想について話し、また、この思想は後に消失したのでなく、引き続き発展したと言われた。そこで私は質問したい。毛の個人独立の思想は、新中国成立後もまだ存在したのか。もしも依然として存在したのであれば、それはどのような現れ方をしたのか。また、この理想はどのような方式によって実現されるのか」。

その時私は何とか回答したが、不十分であった。後から考えたことも付け加えると、以下のようなことが言いたかったのである。

毛沢東の「個人独立、人人連合」の思想は、青年期には「精神の個人主義、民衆の大連合」の形態を取り、それが革命期の「主観能動性、革命根拠地」の形態に発展した。主観能動性は、敵(帝国主義、封建主義、官僚資本主義)の民族的・階級的圧迫に抵抗する民族・人民の一員である個人の主体性を前提とする、敵我矛盾を正確に認識し正確に実践して解決する能力である。建設期には、それが「主観能動性、人民公社」に発展したと思われる。これは、一方で、革命の継続として、米帝国主義の民族的・階級的圧迫に対して、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ民族解放運動と連合して、人民戦争によって抵抗する民族・人民の一員としての個人の主体性を前提とする、敵我矛盾を正確に認識し正確

に実践して解決する能力である。他方で、ソ連社会主義の枠組を「(上からと下からの)二本足で歩く」方式により運用した毛沢東は、下からの大衆運動である大躍進を、「共産主義精神」(自発。人民が貧困と文化白紙状態という不利な条件に抵抗して奮起し、自覚的に猛烈に働く。「奴隷」を脱して「主人」となった。「我のものは人のもの」)を動力として推進し、農民が創造した人民公社を「社会主義を建設して共産主義へ移行するための最良の組織形式」だと高く評価した。「共産主義精神」の核心は主観能動性の最大限の発揮であろう。しかし、これが県・公社党幹部の「共産風」(強制。各生産隊・各個人の収入の格差を否定して均等分配する。生産隊の財物・蓄積・労働力を無償で徴発して公社に集中する。「人のものは我のもの」)により歪曲されたことを察知して、社会主義の原則(労働に応じた分配。等価交換。「我のものは我のもの」)を強調して、後に調整政策に転換した。また、社会主義教育運動を推進して、農村の党基層幹部の「汚職、浪費、官僚主義」を、貧農・下層中農の大衆運動により批判させ、党に自己批判させ大衆路線を回復させ、階級敵の策動を鎮圧しようとして、「実践論」の骨子を強調した。文化大革命の「造反有理」(抗日根拠地、「北京人民公社」→)「紅衛兵組織」は、基層の社会主義教育運動を全国・省の規模に拡大したという一面がある。ただし、紅衛兵の「造反有理」は、毛沢東主席と毛沢東思想に反対する修正主義党組織(学校党委員会。劉少奇・鄧小平指導部に派遣された党工作組。省党委員会)の圧迫に対する造反であり、下からの個人独立の精神は、毛主席と毛思想を信奉し防衛するという上からの枠によって限定され保護されていた。紅衛兵のなかには、楊曦光のように「中華人民公社」の理想を毛沢東以上に徹底的に追求して、文革派国家権力によって鎮圧された「独立思考」も出現した。

また、毛沢東がレーニン『国家と革命』に依拠しながら、「国家とコミュニオン(公社)」の関係を厳密に思考しなかったことが、「紅衛兵が軍・政府と衝突した原因の一つ」(近藤、三三六頁)だと考えられる。

第三に、⑤において、私自身が質問した。

中国共産党中央委員会「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」（「歴史決議」。一九八一年六月二七日）は文化大革命を「徹底的に否定」して、その矛盾を解明していない。それでは文革を「全面的に深く分析することはできないのではないか」。鄧小平も一九八〇年八月二二日には、「資本主義の復辟を回避する」という毛沢東の主観的願望と、彼の「実際の情況」に対する「誤った判断」との矛盾を指摘したではないか（近藤、ix—xi頁）。

「歴史決議」について、司会の楊鳳城氏が以下のように回答した。

「歴史決議」は政治文献であって、学術文献ではない。「歴史決議」は一九八一年当時の特定の場合において「左」派を制圧するための政治文献であるので、文化大革命を「徹底的に否定」するほかなかったのだ。文革の現実を分析した学術文献ではない。毛沢東は理想と現実の差異や距離を痛感していた。毛沢東が文化大革命を発動した動機は、理想（ユートピアの追求）が主要か、現実（劉少奇・鄧小平からの権力奪還）が主要か、あるいは同じ比重か、という問題については、現在の学術界の討論では、理想が主要だという意見が主流である。

楊鳳城氏はおそらく一番若い紅衛兵世代であろう。氏が編集責任者となって編集した『毛沢東研究述評』（中国人民出版社、二〇〇二年一月）を恵贈されたが、これは「マルクス主義理論課教研参考叢書」の一冊であり、「大学、党学校、理論宣伝・学術研究機構の毛沢東思想理論課の教員・理論工作者・研究者が使用する参考書」である。そのような重い責任を持った人物が、「歴史決議」から相当距離を置いた地点に、毛沢東研究の大幅な自由を確保しているとは、予想外であった。

中国共産党が鄧小平の改革・開放政策に自信を持ち、毛劉対立に決着がついたと思ったこと、および毛沢東から直接打撃を受けた世代が減少し、毛以後の世代が増加したことが、おそらくその原因であろう。毛沢東を危険な思想家として批判するよりも、中国の独立と統一の象徴として大切に奉る方が有利だ、という判断がなされたのではないか。

そのほか、③において、楊天石氏（解放世代）から、毛沢東研究は一冊書いただけで終わるはずがない、もう一、二冊書け、と激励された。④において、金沖及氏から著書『五十年変遷』（中央文献出版社、二〇〇四年三月）を惠贈され、また、金氏と逢先知氏が編集責任者となった中共中央文献研究室編『毛沢東伝（一九四九—一九七六）』（中央文献出版社、二〇〇三年十二月）をはじめ大量の毛沢東・鄧小平関係文献を惠贈された。⑤において、張彦麗氏（大学院博士課程）から、「あなたはマルクス主義者か」と質問されて、「マルクスもレーニンも毛沢東も読んで、それぞれ影響を受けたが、自分をマルクス主義者と思ったことはない」と答えると、「日本は右傾化しつつあるようだから、頑張ってください」と激励された。

⑥の終了後、紅衛兵世代の研究者から、「あなたが最後に出した、社会主義と資本主義、平等と自由、労働者・農民・兵士人民大衆と知識人、という三つの問題は非常によい。自分も同じ問題を考えている」と言われた。また、同じ紅衛兵世代の研究者が、「あなたの報告は、中国大陸の学者と意見が一致するところが多い。中国の学者が、自分と意見が異なる米国の研究動向だけに注目して、日本の研究動向に注目しないのはおかしい」と言った。報告会に出席した蔡・王・張の三氏が編集・執筆に参加した、『清華大学「毛沢東思想概論」課程教材 毛沢東と二〇世紀中国』（清華大学出版社、二〇〇〇年）を惠贈された。そのなかに、「毛沢東が生涯追求した理想社会のモデルは、重要な面について言うと、決して五・四運動時期に認識した範囲を超えてはいなかった」（二六〇頁）とあった。青年毛沢東の思想を重視する私と共通点があると思った。

ある報告会の後、次のような見解を聞いた。

「毛沢東は、大衆の大部分はよい、幹部の大部分はよい、と思っていた。幹部のなかの誰が悪人であるかは、最高指導部には分らないので、大衆を立ち上がらせて摘発させるしかない、と考えたのだ」。

「二つの単位に、指導的地位にある人と、そこから外されて不満を持つ人との矛盾があるなど、中国社会には多様な複雑な矛盾がある。そういう矛盾が一挙に爆発して人人が造反し武闘をすると、毛沢東でも統制できなくなり、最後に鎮圧せざるをえなくなった。そういう情況は土地改革にもあった」。

私の見方とは異なるところがあるが、参考になった。

そのほか、紅衛兵世代の人から猛烈な毛沢東批判を聞かされて、私が毛の側に立って反論しなければならなくなるといふ、不思議な役割を演じたこともあった。

三

個人面談では、最初に、前年九月にも会った丁守和氏（一九二六—^①）を永安南里のお宅に訪問し、長い革命体験と建設体験によって鍛えられた、豪放な気風と筋の通った思考に触れて、中国に来たことを実感した。多くを語らなかつたが、中国の現状を深く憂えていることが感じられた。

李沢厚氏（一九三〇—^②）を東廠北巷のお宅に訪問し、一九九一年一二月近代東西方文化関係學術討論会以来、一三年ぶりに面談することができてうれしかった。李氏は一九九二年一月出国して米国に滞在し、ほとんど毎年帰国していたようだが、その間会う機会がなかったのである。風貌も頭脳も弁舌も大変若々しく、衰えた様子が全くなかつた。孔子以前、毛沢東以後を研究したい、「巫史（shamanism）の伝統」が非常に重要だと語った。『歴史本体論 己卯五説』（生活・読書・新知三聯書店、二〇〇三年五月）『告別革命 第五版』（天地圖書、二〇〇四年二月）を惠贈された。蕭延中氏（一九五五—^③）より、「試論関于晚年毛沢東的整体解説」（『毛沢東鄧小平理論研究』二〇〇三年第六期）等五点の論文を惠贈された。

汪暉氏（一九五九— ⑫）より、『現代中国思想的興起』全四冊（生活・読書・新知三聯書店、二〇〇〇四年七月）を惠贈された。

「個人自由」「政治民主」を重視する自由主義派や、それに近い知識人の当面の要求の核心は、「憲政民主」だ、という話を聞いた。それは、一九八六年に鄧小平が政治改革の第一に挙げた「党政分離」の延長線上にあるように思われた。もしそうであるならば、当然の話であろうと考えた。「社会正義」を重視する新左派⁽²⁾は、人口の大多数を占める労働者と農民の生活と社会的地位の低下、共産党幹部の特権階層化、貧富の格差の拡大、という現在の社会問題を強調している、という話を聞いた。「文化大革命を徹底的に否定」することが重大な社会問題をおおいかくす、という批判があると聞いて、一理あると思った。

しかし、両派を批判する知識人もいた。自由主義派に対しては、現在は共産党の集権政治の下で「経済発展」を持続することが最も重要であり、そのなかで「個人自由」を漸進的に拡大して行くべきだ、今すぐ「政治民主」（大統領選挙、普通選挙、多党制）をやれば、「治」から「乱」になる、ソ連のように「全面的西洋化」をやれば、国家が崩壊する恐れがある、という批判を聞いた。新左派に対しては、現状に不満を持つ大衆の情緒に頼る「ナロードニキ主義」だ、民衆の反日や反米の民族主義感情に乗っている、チベット、新疆、モンゴル等の少数民族の独立は、漢族にとっても少数民族自身にとってもよい結果をもたらさない、などという意見があった。

私自身は、両派の知識人は文書合戦をするだけで、双方が一堂に会して率直に意見を交換することを全くしない、という話を聞いて大変驚き、残念に思った。自由な知識人としての長所を最大限に發揮して、双方が自己の最良のものを保存しつつ高めるような生産的な論争をすることを期待したい。

別のある知識人が言った。

外国資本の導入が続き、中国の勤勉・低廉な労働力の供給が続くかぎり、「経済発展」はまだまだ続くであろう。しかし、問題は分配にある。一九八九年六・四天安門事件当時と比べて、汚職・腐敗ははるかにひどくなった。「経済発展」の利益は、共産党幹部ばかりが得ており、知識人は少し得ているが、労働者・農民はほとんど得ていない。このまま進めば、天安門事件よりも大きな「乱」が起こる恐れがある。「安定第一」の下で、司法の独立、および三権分立（相互抑制と均衡）を内容とする政治改革を行わないと、二一世紀の中国の前途は行きづまるであろう。

私はこの話を聞いて、李沢厚氏の議論が頭に浮かんだ。李氏は、一九八七年には次のように述べた。

「この農民戦争（太平天国）の後、洋務（『同治中興』）から変法（戊戌）へ、革命（辛亥）へ、文化批判（『五・四』）へ、という歴史の行程が、今日同一の時期のなかに凝縮されているようである。「経済、政治、文化の三層の改革の要求の錯綜・重畳が、まさに今日の情勢の発展のカギとなっている」（『中国現代思想史論』東方出版社、一九八七年六月、三三五頁）。

しかし、一九九五年に出た『告别革命 第一版』では、李氏は《「経済発展」→「個人自由」→「社会正義」→「政治民主」》の「発展順序」（「論理的順序」、「時間（歴史）的順序」）を説いた（二三一―二四頁）。この間にはもちろん、一九八九年六・四天安門事件の体験に基づく認識の変化があったのであろう。

この二つの説を見比べて考えると、当面は「経済発展」→「個人自由」を主要問題とすることは、それでよいとしても、それが完了しなければ次の段階に進めない、という風に段階論³を固定的に考えない方がよいのではないか。むしろ、当面の状況においても、次要（第二に重要な）問題として「社会正義」や「政治民主」に取り組まないと、当面の主要問題を解決することもできない、と考える方がよいのではないか。四要素について、どのような優先順位をつけるか、それらをどのような比重にするかを、一方で理論の問題として、他方で政策の選択肢の問題として、考えるべきで

はないか。一種の矛盾論が必要であろうと思われる。

(1) これまで私が発表した「日中学术交流の記録」は、以下の通りである。

(一)「中国十カ月」(東京大学社会科学研究所紀要『社会科学研究』第三十五卷第二号、一九八三年八月。湯志鈞・近藤邦康『中国近代の思想家』岩波書店、一九八五年、所収)。(二)「北京・上海の毛沢東研究と井岡山・瑞金の旅」(同第四十卷五号、一九八九年三月)。(三)「中国 一九九〇年三月―七月」(同第四十三卷第一号、一九九一年八月)。(四)「毛沢東の思想」をめぐる日中学术交流」(大東文化大学国際比較政治研究所『IICPS ニューズ・レター』第六号、一九九七年三月)。

(2) 二〇〇一年に、私は中国の自由主義派と新左派の主張を以下のように概括した(日本現代中国学会『現代中国』第七六号、二〇〇二年一〇月。一部字句修正)。

自由主義派…

中国はまだ資本主義段階にもグローバル化にも入っておらず、内の旧体制・旧イデオロギーを克服し、対外開放を拡大・深化すべきである。中国の病気は西洋病・市場病ではなく、中国病・権力病である。中国はフランス→ロシア→中国と伝播した近代左派政治文化という脇道から離脱して、「世界主流文明」に回帰すべきである。市場メカニズムを批判するのではなく、それを改革して、政治体制改革に発展させるべきである(朱学勤の説による)。

新左派…

生産と貿易のグローバル化(「全球化」)の過程で、国際資本と中国の資本支配者(「政治権力支配者」との相互浸透・相互衝突によってもたらされた、体制的腐敗や社会的不正を、制度改革新(崔之元…旧来の社会主義体制の合理的要素を改革に活用せよ)によって阻止すべきである。毛沢東の思想を、「反(資本主義)近代の近代」として評価すべきである(汪暉の説による)。

(3) 本稿が印刷に入った段階で、上記の李沢厚『歴史本体論 己卯五説』二二二頁以下のような記述があるのを見つけたので、補足する。

——『告別革命』の「四順序」説は、「(下記の) 両派およびその他の方面の猛烈な攻撃を受けた」。「特に私が「経済発展(もちろん市場経済を指す)」を第一位に置き、「政治民主」を最後に置いたことが、集中攻撃的となった」。「私の説は(「共産党」専制と抱き合っている(自由派)とか、「人民を裏切った」(ナロードニキ派||新左派)などと批判された」。「告別革命」のなかにかつて「段階」という文言があったが、これは削除すべきである」。